

朝日訴訟において専門職が果たした役割に関する一考察

ー ソーシャルワーカーとして大切にすること ー

日本社会事業大学 実習教育室 氏名 黒川 京子 (7186)

尊厳・人権 ソーシャルアクション 専門職

1. 研究目的

ソーシャルワーカーにとって、きわめて重要で絶対にはずすことのできない視点は、人の尊厳を守り抜くことであろう。そのために、利用者一人ひとりをかけがえのない存在としてともに歩んでいく一方、人が大切にされる社会を築き続ける、社会への働きかけも不可欠であると考えられる。

周知のとおり、1957年に始まった朝日訴訟は、生活保護により長期療養をしていた原告が、人間が人間らしく生きることを世に問い、「人間裁判」と呼ばれた生活保護行政訴訟である。10年後（1967年）に終結とされた後も、数十年を経た現在に至るまで社会に認知されているのは、普遍的な問題を含んでいるからであると思われる。

そこで、自らもソーシャルワーカーとして、またソーシャルワーカー育成の立場からも、人の尊厳と深くかかわる取り組み、そして社会に対するアクションについて、この歴史的な事柄から考え続けていきたい。朝日訴訟当時に、医療ソーシャルワーカー等福祉の専門職がいかなる役割を果たしたのかを検証することにより、今後の専門職のあり方をさらに見据え、現在および今後の実践につなげていくことを目的とする。

2. 研究の視点および方法

このテーマに大きく関心を持つ背景として、以下の三点が挙げられる。①朝日訴訟の承継者として活動された朝日健二氏よりお話をうかがう機会がしばしばあり、「次の世代を担う学生たちに伝えてほしい」との思いを常にお聴きしていたこと。②氏のご逝去（2015年10月）後、東京や岡山で催された偲ぶ会で、当時を知る方々のご経験をうかがう機会を得たことから、当時の状況への理解が深まったこと。③すでに「日本患者同盟」から日本社会事業大学に、朝日訴訟がほぼ網羅された膨大な資料が寄贈され整理されていること。

視点としては、当時の社会背景を整理したうえで、10年間の経緯を追い、その中での福祉専門職の動きや担った役割について明確にする。併せて、医療専門職や司法専門職の取り組みに関してもまとめ、専門職間の連携についても明らかにすることに努めている。

方法としては、マイクロフィルム化されている膨大な資料の読み込みと整理を軸に、文献研究として進んでいる。

3. 倫理的配慮

所属大学の研究倫理委員会を通す。所属大学の研究所には、申請の旨を既に伝えており、近日中に申請書を提出する。そこでの承認を発表の前提とする。

また、発表前に、「朝日訴訟の会（特定非営利活動法人）」の中心の方々に確認していただき、アドバイスを得ることにつき、了承していただいている。

また、日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守する。

4. 研究結果

おもに、日本患者同盟の資料（上記のとおりフィルム化されている）を中心に、「朝日訴訟運動史」「炎は燃え上がる」などの文献を加え、読み取ることができることは。以下のとおりである（今後、さらに進むことになる）。

①1957年8月の提訴から1960年10月の第一審判決（原告の主張が全面的に認められた）までの間に、13回の公判、および1回（3日間連続）の現地検証・現地公判が開かれた。その中で医療ソーシャルワーカーも証言台に立ち、患者の生活、医学的見地を踏まえた日用品や補食の必要性を詳細な数字を挙げて述べ、その時点の生活保護基準に妥当性のないことを専門職として明らかにした。経験と知識を有するが故の証言と位置づけられる。。

②多くの人（労働者）が苦しい生活を送り、「生活保護基準が改訂されることが、労働者の賃金にも大きく影響する」と信じて、裁判の支援活動を展開していた。福祉職もその活動の中に加わり、リーダー的な役割を果たす人もいた。専門職としての発言は、人の尊厳・人権に関する意識の高まりに寄与した。

③文筆や集会等により世論に働きかけるとともに、患者や他の専門職の相談と向き合った。

医療専門職である看護婦（看護師）の中には、朝日氏の床頭看護の際に、訴状などの文書を代筆していた様子もうかがわれた。

5. 考察

現在と1950～60年代とでは社会状況、労働環境、社会保障をはじめ、様々な相違点はあるが、共通する社会的課題もあるはずである。また、ソーシャルワーカーが大切にすべきことの根本は、時とともに変わるものではない。

朝日訴訟時に、人間としての尊厳を訴える原告および自らの生活をかけて支援を展開した人々と、ソーシャルワーカーはつながってきた。①人間の生活に対する的確な知識を持ち、必要なときに伝える力、②自らの権利を勝ち取ろうとする人々が力を発揮できるように支える取り組み、③人間の尊厳が大切にされる社会を築くことを目指した、社会に対する働きかけ、など、現在においても非常に重要な役割を果たしてきたことが理解できる。さらに綿密に掘り下げ、次世代に継承するとともに、現在とこれからの実践の糧としたい。